The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学習環境学研究序説 : 学習条件整備の方向性
Author(s)	阿部, 彰
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1996, 22, p. 411-432
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4045
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

学習環境学研究序説

－学習条件整備の方向性－

阿部　彰

目　次

序　――なぜ、今、「学習環境学」なのか？

1．学習環境学の研究課題と視点

1）　学習の「場」の点検と調整

2）　学習の創造的展開の支援

3）　学習施設の刷新

2．学習環境学の研究対象と研究方法

1）　人間形成の過程と学習環境の役割・機能

2）　学習環境整備の諸条件と改革プラン

むすび　――「いのち」への気づきと発露を支援する学習環境づくり

学習環境学研究序説

－学習条件整備の方向性－

阿部　彰

序　－－　なぜ、今、「学習環境学」なのか？

近年の教育学および関連諸分野の専門分化と、それぞれの領域における研究の進展と蓄積には目覚ましいものがある。学習条件の改善に向けて緻密な研究成果が行政施策上にも生かされるようになり、幾多の実践課題の解決に大きく寄与してきている。

しかしながら、その反面において、学問の細分化・専門分化や実用化が、とかく安易な数値至上主義や還元主義に走り、本来、流動性、多様性、内発性の中にこそ「生の本質」を有する人間の精神活動を、固定的、画一的、一方的な「見立て」によって極付け、結果的に、学習者の「いのち」（個性、創意性、内発性に根ざすその人らしさ）の発露を阻害しかねない事態が生じていることも否定できない。

学習環境学は、このような実態をふまえて、人間のあらゆる学習の機会・場・関係を「包括的」な視座に立って考察し、自発的、永続的、双方向的な学習活動を支援するための実際的な指針を得ることを課題とする、いわば学習条件整備学である。この主旨に則して、本稿では、学習環境学が取り組むべき課題例を提示するとともに、その研究上の視点と方法について概観する。

1．学習環境学の研究課題と視点

1）学習の「場」の点検と調整

学習環境学の第一の課題は、生涯にわたる学習機会を整備するにあたって、多様な学習の「場」の形態、機能、推移およびその人間形成に及ぼす影響等について実態を把握し、各年齢段階、地域の状況に応じた計画立案のための総合的な再点検と調整を行うことである。

この課題に取り組むに当って、まず、力点と配慮が加えられなければならないのは、心身の発達が最も著しい幼・少・青年期であることは言うまでもない。脳内部の神経網がほぼ完成し、頭の重量が大人並となる３歳ごろまで、さらに神経網が身体全体に行きわたり、脳細胞と感覚器官・運動器官との連絡網が完成する８、９歳ごろまで、そして、この神経網の整備と並行し

て、張りめぐらされた神経のネットワークを使って多様な行動パターンが形成され（「回路づくり」）、創造活動が活発に展開される青年期ごろまでは、まさに白紙の状態から人間としての基礎部分が創られる重要な時期であり、それぞれの段階の発達が、外からの刺激と身体や感覚の反応との連動のもとに展開されるだけに、それを取り巻く環境条件が極めて大きなかかわりをもつことになるからである。

表１－１は、幼年期から青年期までの学習環境として位置する関係領域の、子どもとの関係における性格と問題点を列挙したものであるが、概して、家庭、仲間、自然、地域などが地盤沈下し、日常的な人間関係や実体験部分を受け持っていた領域が後退傾向にあることが、ほぼ全国的な傾向として定着している（厚生省児童家庭局『全国家庭児童調査結果報告書』1991年）。

表１－１　学習環境としての各領域の性格と問題点（幼・少・青年期）

領　域	基本性格	問題点
家　庭	・人生の始発・終着点 ・日常生活の基礎訓練の場 ・人間性、情緒性の醸成 ・個性の芽生えと育み ・安心感、心の拠り所	・愛情の過多（盆栽型、召使型） ・愛情の拒否（厳格型、放任型） ・先取り訓練（早期英才訓練など） ・安易な、役割の外注化 ・チーム・ワーク（父母の連携）の失敗 ・親の幼稚性
仲　間	・創造活動の源泉としての遊び ・「子どもの世界」の共有 ・経験の補完（異年齢集団との交流）	・遊びの時間・空間の減少 ・遊び（相互交流の習慣）の消失 ・遊びの管理化
自　然	・内発性、感性、直感力を培う（創作・創造意欲を促す） ・「生の原点」を想起させる（底知れぬ包容力・復元力）	・都市化と自然環境の破壊（経済至上・効率優先主義） ・人間の発想の固定化（受動型・画一型）
地　域	・日常的なふれあい、交流の場 ・親密な人間関係 ・連帯感、同郷意識	・都市化傾向による人間関係の希薄化 ・価値観、生活リズムの多様化 ・社会教育施設整備の立ち後れ
マスコミ	・多量、同時、迅速な情報提供（文化の普及と共有に寄与） ・頻繁な、メディアの交替	・権力、利権に弱い体質 ・一方的、送り手の論理・都合優先 ・制度的なウソ（作り上げられた虚構） ・意識の画一化傾向 ・擬似体験の肥大と実感の欠落
学　校	・広範・多彩な体験の場（生活、人間関係、課業） ・計画性、組織性、集約性 ・公共性・開放性（階級的・特権的性格の払拭）	・「個性・自主性」尊重への取り組みの立ち後れ（体験の不均衡） ・「豊かさ」の中の「貧困」（価値観の単一化、可測的側面の偏重） ・政治、経済目的、学歴獲得の手段化 ・効率最優先を志向する類似施設の隆盛

一方、地域や家庭の教育機能の一部を集約する形で成立した学校（類似施設を含む）は、マスコミとともに、強い影響力を保持しているが、知識技術の伝達、資格の付与といった目に見える部分については相応の役割を果たし成果をあげてはいるものの、人間関係や自然や事物との密接な関係の中から「生活の知恵」を学びとって行こうとする部分には、従来あまり配慮が払われなかった。だが、これらの機能は人間生活の基盤をなすものであり、学校が地域に根ざし生活感のあふれた存在としての役割を果たすためには、当然重視されなければならない必須部分である。したがって、衰退しつつある家庭、仲間、自然、地域の機能をいかに回復、補強、支援するか、と同時に、学校における活動に調整、補完的役割を加味しながら、いかに総体的にバランスのとれた学習環境づくりを工夫するか、が課題となる。

各領域の現状と問題を、横軸（地域性）や縦軸（時代性）を伴ってさらに精査分析を深めることが必要ではあるが、同時に、この時期の学習環境のあり方が他の世代に及ぼす影響について、逆にその結果をフィードバックして幼少年期の学習環境の方向性を探る指針とする目的を含めて、集中的、継続的、学際的な視座で取り組むこともまた重要な課題として提起される。たとえば、幼少時における「遊びの三間」（時間、仲間、空間）の欠如や実体験（対自然、対人）の不足が青少年層、成人層、老年層の各世代の生活態様や行動様式にもたらしている幾多の具体的現象の実態把握とその分析は、まさに、世代の枠組みを越える視座をもって環境条件の整備を志向する学習環境学が取り組むべきの課題のひとつである。

中高年層の学習環境としては、それまでの学校に代わり、企業・団体等の帰属組織、趣味などの同好グループ、各種社会教育施設などが加わるが、学習機会を充実して現在及び将来の人生の充実を期す上での課題は、当該時間の確保の問題である。従来から、残業や休日出勤が接待業務とからんで日常化し、日本の企業は、従業員の家庭人、地域社会人としての当然の役割を果たすべき時間さえをも制約している、と国際的な批判があるように、勤務時間外の私的な時間の利用に関して、きわめて無頓着、無配慮であった。ために、会社への過剰適応型人間の輩出を促し、企業活動を強力に支えてきた反面、退職するや、その後の心の支え、拠り所を一挙に失い、うつろに余生を空費する場合が少なくなかった。このような人生五十年時代の慣行は、当然、その基盤を失い、従業員の余生充実のための準備支援が、企業の社会的責任であるとの認識をより明確に定着させることが、学習環境整備の前提として必要である。

併せて、企業等の性急な人材要求が、幼少年期の学習環境にひずみをもたらしていないかを点検することも重要な課題である。近年、職場や社会生活、家庭生活に対して不適応症状を呈し、人生の最高潮期を台なしにし、あげくの果て反社会的行動に走る若者や、子育て不適応症候群を呈し乳幼児を虐待する高学歴の若い親が多く見られる。これらの現象の背景に、はたして、画一性・柔順性・効率性といった、独善的な人材要求を一貫してかかげてきた企業・経営者団体の姿勢や、それに迎合し立身出世主義に走る親の対応が、幅広い生活力の基礎を養うために当然機能すべきであった幼少年期における学習環境の存立や役割に、何の影響をももたらしていない、まったく無関係である、と言えるであろうか。

老年期の生活における、幼少年期の学習環境との関係の検証も重要である。多年にわたる企業人、家庭人としての「役割演技」から解放された老年期こそ、まさにマイ・ペースで、腑に落ちる生活を通じて生きる実感を味わえる、「人生の春」の再来とでも言えるときである。このとき、よみがえり、心踊らせる素地を、幼少年期間に体得していたか否かが、この時期を、それまでにも増して充実して締めくくる結果をもたらすのではないだろうか。このことは、人間関係や無駄を遠ざけ感動や感激の少ない人生を送ってきた人間ほどボケ症状(老人性痴呆症)が出やすい、との症例実態報告をも裏づけることになる。

2） 学習の創造的展開の支援

学習環境学の第二の課題は、創造性と個性を育む学習環境を整備する方法と計画に対する大局的、かつ長期的な展望の必要性である。

可測的側面に極端に力点を置く強引な学習環境整備が、人間の機械的対応を促し短期的に数値上の指標を高めるに相応の効果をもつものではあっても、創意と活気に満ちた安定した効果を持続させることはできないものであることをわれわれは過去の経験から体得している。

たとえば、日本における近代教育制度がごく短かい歳月で国民一般に教育機会を提供し、国民の真摯な勤勉さと受容姿勢と相俟って、欧米の水準に到達するに果たした役割は高く評価されてきた反面、長年にわたり繰り返された画一的で硬直化した学習素材によって、日本人の認知形態に不均衡が生じ、創造性や個性の基盤となる感性的側面が衰退したり、高度な情報機器を駆使できながら、対人関係や生身のコミュニケーションの能力が退化したり、長期にわたる知的な学習機会を経ながら、内発性、自律性に立つ行動様式についての実体験を欠いた結果、政治的・宗教的な権威、学歴、金銭に盲従して人間性を欠く行動を引き起こす若者の事例を多発せしめている。

とくに、1960年代から世を風靡した高度経済成長政策が現代の学習環境の変化に与えた影響は計り知れないのものがある。工業化の促進をめざす需要開発や人材養成の必要から学校増設や教員の大幅な増員が図られ、教育界にも数値上の活気がもたらされたが、産業構造・雇用事情の変化、急激な都市化・工業化による自然環境破壊、消費経済の展開、そして、これらに伴う国民の生活・金銭感覚の変化は、過疎過密化した地域共同社会や、パート労働や長時間労働で父母を遠ざけた家庭から教育力を奪い、子ども同士の連携の希薄化をもたらした。学校も、都市部で急激に増加した児童生徒を収容するための施設整備に追われ、学習環境を総合的に点検し、調整や補完の配慮をする余裕をまったく欠いていた。それが非常事態にあたっての一時的な対応ではなく、体質的・構造的なものであることは、のちに、大都市部の学校に教室や教員配置に余裕が生じても適切な対応策を取り得ていないことからも明らかである。

高度成長期以後、都市部を中心に、各地に広がった子どもたちの心のすさみに起因する現象（校内・家庭内暴力、三無傾向、いじめ、登校拒否など）は、その日常生活の中に「いのち」の影が見えないことに対するいらだちの反映であるといえる。幼少時から自然や仲間と生身の

体験を重ね、内発性、自律性に立つ行動を日々の生活で実感してきた者にとって、多様な「いのち」へのおそれ・とまどいや「いのち」の発露を疎外・妨害してきた者に対する生理的な怨念はないからである。

学習環境学は、学習者が誰もが必要とする時にいつでも主体的に学習に参加する機会を得て、参加と交流により自己実現が可能となるような「場」や「関係」の実現を期し、過去、現在の実態をふまえ、未来にむけての実践プランを提示しようとするものである。

しかし、近年まで、学習環境として最も計画化、組織化されている学校の実態（教授・学習過程）は、必ずしも学習者の立場や心情を配慮したものとは言い難く、むしろ、政治や経済上の目的や利害に密接に結びついて展開することが少なくなかった。いわば、組織の方針に人の行動や精神を合わせるのが教育や学習の目標であっても、逆に個々人のニーズに徹底して応えるための組織を整えるような発想は、日本の風土には長年にわたって育つことはなかった。

もとより、人は、学習を通じて人間特有の認知・行動特性に由来する、相対立する資質をバランスよく培い、場や状況により使い分けて、臨機応変、しなやかに生きる力、いわば「幅広く生きる力」を身につける権利を等しく有するが、それを裏づける実態（学習環境）は、前掲の経緯を反映してかなりアンバランスで、きわめて多くの問題をはらんでいる。

表１－２　人間の認知・行動特性と学習を通じて培われる資質

認知・行動特性	学習により培われる資質	
	内から沁み出る知恵による	外から取り込む知識による
人間の認知特性	感性 ←－－－－→	理知性
人間存在の特性	個性 ←－－－－→	社会性
人間の行動特性	自律・独立性 ←－－－－→	適応・依存性
【学習活動の流れ】	⇧ ⇦ 人 ⇨ ⇩ ←－－－－→	↓ → 人 ← ↑
【学習活動の支援】	「内部動機」後援（間接・消極的） ←－－－－→	「到達目標」提示（直接・積極的）

学習の過程において培われる資質は、表１－２のように２つに区分することができる。ひとつは、理知性、社会性、適応性など、社会において組織人として活動するに不可欠な要素で、人間生活の基幹部分を構成する。主として、外部から示される到達目標やモデルに則して短期的、効率的な学習が展開される。いわば、外から取り込む知識によって培われる資質である。

もうひとつは、感性（感受性、直観）、個性、自律性など、その人らしさ、創造的発想、生きがいなど人間生活にうるおいと生気をもたらす部分に相当する。主として、内発的的なエネルギーの発露により、各自多種多様な学習を展開する。これは、いわば身体の中から沁みでる知恵によって培われる資質である、といえる。

両者は、もちろん、対峙し共存を拒否するものではなく、相関相補の密接な関係にあるが、古今東西を通じて、とかく、可測性が高く、政治的・経済的利害が密接に絡む前者に関心と主力が注がれ、加えて国家（教育政策）の関与が偏重傾向をより助長増幅する結果をもたらしてきたといえる。今日、教育・学習に関わって引き起こされている各年代、各層のひずみや問題行動の要因の多くが、このアンバランスに派生しているとみられることから、これに関する実態把握と調整が緊急の課題であり、関連領域の複雑、広範さから、ここに学習環境学の総括的な視点が生かされることになる。

ここでは、認知構造の基礎に位置し、人間の存在や行動を方向づける感性と理知性との関係を中心に考察する。（図１－１、表１－３参照）

図１－１　理知性と感性習得のプロセス

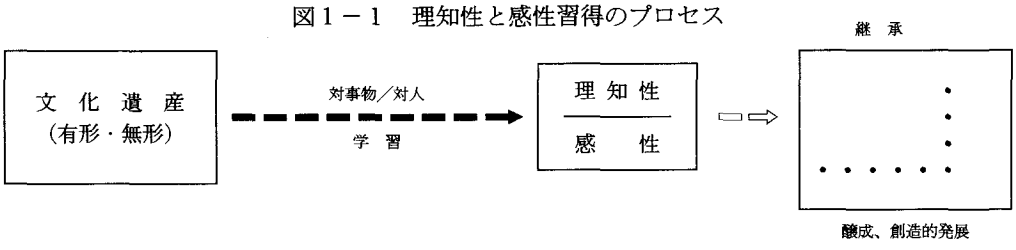


表１－３　理知性と感性の特徴と促進基盤

	理知性（知識・技能）	感性（感受性・共感・気づき）
特　　徴	量的（可測的） 応用的 限定的、還元的 論理的、合理的 機械的、短期的、静的 模倣、忠実性 精神の硬直化・画一化を促す 展開に「時間」が必要 外から取り込む 教える・教わるの関係 文字、言葉（伝達容易） 「推進力」の役割	質的 基礎的（感ずること＝生きること） 包括的、総合的（観、勘） 直観的、情緒的 創造的、発展的、永続的、動的 独自性、自分らしさ 新鮮、若々しさ、精妙さをもたらす 展開に「空間、関係」（場）が必要 中からにじみ出る（内発性、自分） 共生（共に生きる）の関係（双方向） 雰囲気、気配、しぐさ（伝達困難） 「方向舵」の役割
促進要因 基　　盤	地位、利益、学歴（手段） 恐怖（競争）、緊張、権威 机上（書物、機械）	創造的活動、コミュニケーション 自由な雰囲気、リラックス 自然・遊び（空間、時間、仲間） ・人間関係（実体験）

教育界には「教授・学習過程において、取り上げるべきは客観的に訓練の対象となり得る理知性であり、感性は特定の人物に遺伝によって与えられた神秘的なものとして、その範囲外に置くべきである」との思いこみが根強く残っているし、近代合理主義、効率主義の立場からは可測性の低い部分については軽視する傾向があるが、感性は、理知性とともに、認知の基本部分を構成し、人間生活に不可欠な重要なはたらきである。

感性の習得プロセスは、理知性とは異なり、各種文化遺産を形式的に受容するのではなく、そのもつ雰囲気、傾向、気配など五感をフルに発揮して獲得するのみならず、その過程を通じて接触する人との交流、コミュニケーションを通じて得た実感、体験をも伴う。いわば、理知性は「外から」の刺激に対する大脳（新皮質）の反応にすぎないのに対し、感性は、当該刺激に対する「内から」の呼応的な反応であり、両者は認知機能において一体的な、相関的なものであるといえる。だから、理知性は、感性が伴ってこそ意味があり、それ自体では、生命をもたないに等しい。理知性として「外から」獲得するものを意味づけし、さらに発展性をもたせ、創造的な展開を期すためには、その人独自の発想や観点を加味することが不可欠であり、当該素材に対する「内から」の感性の発露（心情）が必然的に介在する。たとえば、網膜上にできる像はすべての人に同一に現れるはずなのに、認識に食い違いが生ずるのは、知覚は網膜上のデータを単に機械的に同化するのではなく、その人の感性を反映した独自のイメージを創出するからである。書き手や歌い手の気持ち・心情が籠められていない書物や歌は、たとえ論理的技術的にいかにすぐれていたとしても、それだけでは読者や聞き手の琴線にふれることは少ない。

感性は、五感を駆使した自然や人や事物との濃厚な接触（実体験）を通じて育まれる。幼少年時代の野原、川での遊び体験から友好的で楽しい仲間関係を持続させるための我慢や配慮、危険察知・回避能力などの適応能力（勘）を獲得し、事物のさりげない観察や友達との交流を通じて姿、考え方、行動を超えた微妙な差異を味わい、さらには人間が自然の事物と同一の物質から構成されており土から産まれ土から生えるもので養われ土に返るものであること体得する（観）。いわば、理知性が効率的に、しかし断片的な情報を収集提供するのに対し、感性は、一見無駄に見えるような実体験を通じて熟成された総括的な「生活の知恵」を蓄積提示する。

今日における感性の育みの難しさは、絶対的に優勢な位置にある理知性（それに根ざす止め処もない欲求）との関係にある。近代合理主義社会は、認知構造における理知性の優位性を基盤に成り立ち、感性的な部分は経済効率上、無駄なものとして無視、軽視してきた。高度成長期において、家庭から団欒やしぐさや身ぶりの世界を放逐したことに象徴されるように、産業効率に反する社会的文化的機能を贅肉視し、感性を培う素地を学校や社会から排除した。感性を欠いた人間の行動は、ますます理知性にたより、操作された情報に振り回され、過熱、暴走傾向を強めていることは周知の通りである。

この事態を打開することは、惰性から脱しようとする意志さえあれば、そんなに難しいことではない。各人が、理知性に優先して感性を働かせ、他人の心情や事物の道理をくみ取る感触を回復させる一方、きらびやかな情報に流されることなく腑に落ちる生き方を模索して自分ら

しさを見いだす地道な取り組みを行うことである。加えて、昨今の、電子技術の開発によってもたらされる時間的余裕を、率先して感性的側面の補強に振り向けるべく方向づけるならば、人間とコンピュータとの良好な関係を将来にわたって約束する重要なルールとして画期的な意味をもつことになろう。

3） 学習施設の刷新

学習環境学の第三の課題は、学習環境たるにふさわしい施設の基本計画、構造、運用に関する全体的視座からの検討の必要である。

従来のように、狭い利用目的を掲げ、一部の限られた用途、年齢層、対象のみに利用を制約したり、また、管理を最優先させ、生活感覚を欠いた殺風景で収容所もどきの施設は、学習施設として存立の基盤を失う。そして、狭い行政的な縄張意識や実生活からの隔離主義を断ち切り、代わって地域との結びつきや、風土、自然、音、香り、緑など生活実感の豊かさを土台にした地域学習施設計画に着手されなければならない。

まず、ここでの最大の課題は、各地域にくまなく設置され、地域住民にとってもっとも関係の深い施設でありながら、旧来の枠組みからの脱皮が遅れがちであった学校施設のあり方である。わが国の近代学校の施設整備は、就学年限の延長、戦災・災害復旧、人口増加、都市化等による量的な施設整備に追われ、質的な側面での本格的な対策は、学校増改築の必要が一段落したここ十年来ようやく着手され始められたにすぎない。（表１－４参照）

1982（昭和57）年７月８日、文部省は、各都道府県に通知「学校施設の文化的環境づくりについて」を発し、「創造的で人間性ゆたかな児童生徒に資する文化的な教育環境を整備」するよう指示した。この文書のなかで、文部省は、従来、学校施設が「とかく画一化された、うるおいの少ない施設」として文化的な要素を加える配慮に欠けていたことを率直に認め、今後の整備計画にあたって、つぎのような諸点に留意して検討を進めるよう提起している。まさに、近代学校成立以来110年目にして学校施設整備の力点がようやく質的な側面にも及び始めたことを示すものであった。

（１）校舎の配置、造形、色彩に工夫を加える

多様な造形、色彩の内装・外装、工夫をこらした天井や床、吹き抜け空間や勾配屋根などをもつ校舎

（２）校舎壁面、床に装飾を施す

レリーフ、ステンドグラス、デザインに工夫された手すりなど

（３）児童生徒相互・教師とのふれあいの場、文化活動の場などを設置する

談話スペース、展示スペース、多目的ホール、食堂語らいの広場、屋外ステージ、屋外展示場、野外炊飯施設など

（４）屋外環境の美化をはかる

植樹、造園、校門、植えこみ（垣根）、校内緑地など

（5）活動的屋外環境を整備する

ジャングルジム、木登りの森、冒険の森など

（6）鑑賞用展示物を設置する

彫刻、絵画、書、郷土資料など

この趣旨は、学校施設のうるおいのなさが、折から多発していた校内暴力、いじめなど児童生徒の心の荒廃を加速しているとの世上の認識と一致し、以後、全国各地で新増築にあたって内・外装を従来の白や灰色一辺倒から改めたり、校舎壁面にレリーフを取り付けたり、児童生徒の減少による空き教室2教室を合体して板張りの多目的ホールを設置したりする工夫がなされ始めた。しかし、この方針は、各地の財政事情や児童生徒数の増減に配慮し、可能な範囲から実施しようとする、徹底を欠くものであったため、学習条件が極めて劣悪で「文化的環境づくり」が緊急に必要とされる都市部の過密校には、ほとんど寄与しないという矛盾を抱えていた。加えて、この文書では、地域住民の文化活動の場、生涯学習の場としての具体的な提言がなく、学校施設内部の当面の応急的対策の性格が強かった（1990年の中央教育審議会答申「生涯学習の基盤整備について」で学校の役割が明示される）。

今後の学校における学習環境の整備にあたって、とくに留意すべきことはつぎの3点に集約されよう。

第一に、認知能力発達支援のため感性的側面を重視することの意義と方向性を明確にすることである。さもないと、人や自然物へのふれあいの場、実体験の場が、単に理知性の涵養のための付随的なもの、息ぬきのためのものとして取り繕われ、実体が伴わない弥縫策にすり替えられるきらいがある。

第二に、学習環境としての学校規模の適正化（児童生徒総数：最大240人程度）を進め、現有の校地、施設、教室のゆとりある再利用計画をたてることである。抜本的には、耐用年数が経過した校舎から順次全面改築を実施するが、差し当たりは、現在の2教室を1教室に改造し、校地内の緑地化を進め、生活感のあふれた学習環境づくりを進める（図2－2参照）。児童生徒数の減少傾向をむしろ積極的に環境改善に生かすべきで、行政効率向上を掲げた安直な学校統廃合、長期的な見通しと視座を欠いた「余裕教室」の目的外転用などは、この流れに逆行するものである。（「余裕教室」の特別教室等への転用促進については、1988年6月に教育助成局長からの通知があるが、普通教室の条件改善への利用には消極的である）

第三に、学校が学習環境を整えるにあたっては地域と二人三脚の体勢を組み、単に学校施設の改良の視点ではなく、地域住民全体の学習・生活条件を充実する視点と姿勢を堅持しなければならない。この観点から、主要施設（図書館、体育館、小ホール、プール、屋外炊飯施設、食堂、校内緑地）などは地域共用（ただし、授業時には学校が優先的に使用）として格段に充実したものを校地内に確保する方途を講ずるのが、地域と学校との日常的な交流、施設の維持管理の利便、有効利用の上からも得策である。

表1－4　学習条件の整備過程（1872－1994年）

		【義務教育諸学校(小･中)】	【後期中等教育諸学校】	【高等教育諸学校】
1872（明5）	「学制」	小学	中学	大学
1886（明19）	「諸学校令」	小学校令	中学校令	帝国大学令
		（4年義務制：1学級最大80人）		
1890（明23）	教育勅語			
1899（明32）			実業学校令	高等学校令
			高等女学校令	
1902（明35）		小学校の就学率90％超える		
1903（明36）		（1学級定員最大70人）		専門学校令
1907（明40）		小学校の義務教育年限延長		
		（4年から6年に）	中等諸学校拡張	
		単式学級が一般化		
		高等科増設機運高まる		
1918（大7）				高等諸学校拡張(私立大)
1923（大12）	関東大震災		盲･聾唖学校令	
1926（大15）		幼稚園令	中等諸学校拡張	
	昭和恐慌	3学級2教員制		
1934（昭9）	室戸台風	校舎の鉄筋化始まる		
		義務教育年限延長＜8年＞構想		
		（戦争激化で具体化に至らず）		
1941（昭16）	太平洋戦争		［理工科系戦時拡張］	
1945（昭20）				
1947（昭22）	「教育基本法」			
	「学校教育法」	新制中学校(義務制)		
		1学級定員標準:50人		
		養護学校制度		
1948（昭23）			新制高等学校発足	
1949（昭24）				新制大学発足
1956（昭31）	高度経済成長はじまる	ベビーブーム(一次)による小･中学校増設	［高度成長政策による理工科系拡張］	
1961（昭36）				高等専門学校制度
			ベビーブーム(一次)による高校増設	
1962（昭37）		50人学級編制達成(小･中)		
1964（昭39）		幼稚園振興策(人口1万に1園)		
1966（昭41）			50人学級編制達成	18歳人口増による
1967（昭42）				高等教育諸学校拡張
	過疎過密問題	過疎化による学校統合		(一次)
1972（昭47）		都市化による学校増設		
1973（昭48）		小･中校舎の高さ制限を4階に緩和		
		5歳児の就園率60％を超える		
1974（昭49）			高等学校の進学率90％を越える	
1976（昭51）	公害問題			高等教育への進学率38.6％
1979（昭54）		養護学校の設置義務(府県)		
1980（昭55）		ベビーブーム(二次)による小中学校増設		
	いじめ、不登校			
1981（昭56）	校内･家庭内暴力	「ゆとりの教育」		
1982（昭57）		「学校の文化的環境づくり」	ベビーブームによる高等学校増設(二次)	
1990（平2）	少子化傾向	40人学級編制達成(小中)		18歳人口増による
1991（平3）			45人学級編制達成	高等教育諸学校拡張
1992（平4）				(二次)
1993（平5）			単位制高等学校	
			40人学級へ年次着手(5年計画)	
1994（平6）			総合学科	組織･カリキュラムの弾力化

［注］下線部は、学習条件の質的側面(個別･多様性に配慮)にかかわる事項を示す
大部分の事項が、量的側面(法制整備、就学人口増、都市化、災害･戦災復旧)にかかわるものである

2．学習環境学の研究対象と研究方法

1） 人間形成の過程と学習環境の役割・機能

学習環境学の研究の第一は、生涯にわたる人間形成の過程における学習の場、関係、背景に関する多角的、具体的、継続的な調査研究にある。

実態調査報告書、各種行政文書、研究論文、映像記録など、現況把握に資する調査研究データの収集分析が当該調査研究の出発点ではあるが、複雑多様な人間行動を対象とし、感性の領域を含む認知発達の経緯に焦点を当て、それぞれの学習環境が生涯発達に及ぼす関係を総括的に考察するためには、当然長期的な視座に立つ調査研究の手法が用いられなければならない。

最も、基礎的で、本調査研究の原点として重視されなければならないのは、各時代を個性と自発性を発揮して生きてきた人々の生きざまの記録である。過ぎ去った時代を想起し秩序立てて記述することは、多くの人々にとっては困難を伴い、かつ、機会も少なく、作家や一部の著名な政治家、成功した産業人などの自伝、回想録、日記などに限定されるが、とくに、内面的な記述に経験と精力を発揮している作家の作品群には、それぞれの場において、何に影響、触発され、どのような行動をとり、どのような感性の発露をみたかなどの記述が生々しく再現されており、視点を整理する上で大いに参考になる。その技法と視点は、一般の人々に、インタビュー（面接聞き取り調査）によって、豊かで身近な過去の体験を聞き出すためにきわめて有効に活用できる。これは、学習の場のきめの細かさと奥行きを広げ、調査の手がかりや方向性を探るために必要不可欠であるが、記憶の曖昧さを関連資料で確認補正する作業を必然的に伴うものであることは言を俟たない。

ある時代、ある場における雰囲気、気配、傾向、人間の表情、しぐさについては、映像資料（映画史料）によって、観察、分析を進める必要がある。とくに、連続した動きを以て表現する特性を持つ映画は多くの情報を集約かつ総合的に提示し、改めて文書や聞き取りでは、捕らえられなかった部分の大きさと、その重要性に気がつく。学習環境としての現象や印象を規定し、具体的に表現しているのは、その間隙、周辺に位置する雰囲気や表情などであることがわかるからである。劇映画など脚色した作品も、多くは時代考証が精密になされているから、考察・分析素材としての価値は十分であるが、零細な規模で過酷な条件下で製作されながらも製作者の熱意にささえられてきめの細かい描写がなされている、多くのドキュメンタリー作品（記録映画・映像）からは、さらなる情報と示唆を得ることができる。

調査・研究資料として、映画・映像を利用する方法は未だ確立していない。調査分析の経緯、結果を相互に交換し容易に確認する手だてを打ち立てない限り、当該分野の研究は文芸評論的な域にとどまり、進展は望めない。課題は多いが、第一に、関連映像・映画がだれでもどこでも手軽に視聴できるような映像ライブラリーの普及・充実を図ること、第二に、映像・映画分析を用いた研究上の基本的なルールとして、時間経過をフレーム単位で明示した「場面展開表」を作成すること、が当面、実現を期して取り組み得る部分であろう。

さらに、調査研究の資料として、映画会社、TV放送局や映像・映画作家が製作したものを利用するにとどまらず、研究機関・研究者自らが、学習環境研究の一環として継続して映像作品を制作し、当該資料を蓄積し相互利用する体勢を整える必要がある。10年、20年規模の長期観察や、観察対象をしぼった追跡調査記録を映像手段をも伴って進めることは、学習環境研究を特徴づける有力な方法である。この態勢を有効に確立し継続せしめることができるかが、結果的に、研究の具体性、実証性のみならず、研究の精度、信頼性を高めることにつながる。

学習環境の背景に関する調査分析では、上記の諸手法の活用に先立ち、まず文書資料による政策形成・実施過程に関する考察が徹底して行われる。大正デモクラシー、戦争、高度経済成長、過疎過密化など、政治・経済・社会的な変動が学習環境の構造・機能に連動し、人間形成に及ぼす影響をさぐることに焦点が置かれる。とくに、第二次世界大戦や高度経済成長がもたらした学習環境に対する長期的で根の深い「汚染」や「教育公害」などが、本領域において総合的な視座を生かして取り組むにふさわしい課題である。

2）　学習環境整備の諸条件と改革プラン

学習環境学の研究の第二は、前項の調査研究の成果をふまえて、学習環境整備のための政策課題、将来計画、具体的改革プランの提言を行うことである。

これまでの考察によって、とくに高度成長期以後、長期的視座を欠く対応の積み重ねにより、学習環境上のアンバランスが生じ、各世代にそのひずみが波及する懸念があることがわかった。そして、究極的には、それぞれの「場」の機能の復元を期すとしても、当面、学校が、その本来持っている機能をより顕著に発揮するという意味で、調整、補完の中核的役割を担うのが望ましいとの、方向性を見いだすことができる。

自然や人との、日常的に実感を伴なう接触や交流の機会をふやし、とかく目に見えやすい成果の陰に埋没しがちであった内発性や創造性を育む場を、いかにして学校生活の日々の中に定着させるのか。差し当り、現状の枠組み（既設校舎・教室の部分改修）の範囲内で実現を期すとすれば、校地内の環境条件および教室内の環境のあり方に関し、以下（図２－１、図２－２参照）のような改善プランを一例として提示することができる。

図２－１の校地内の環境改善計画は、耐用年数が経過し校舎の全面改築を行ったことを想定している。在学児童生徒数は、約半分ないし３分の１、急増期の５分の１程度に減少するが、学校が旧来の、単なる修養・鍛錬や知識技術伝達の場ではなく、生活・出会いの場、いのちを感受する場として、広範な学習・体験の機会を提供する機能拡大の趣旨から、校舎・校地の基準面積は従前通りとする。

滝を配し小魚や水中生物が棲息する池、校地の周辺を囲む流水路、小鳥や昆虫が集まり季節感あふれる果実や花をつける数々の樹・草木があり、散策や木登り、簡単な演奏や発表（ステージ）、野外炊飯などの活動が日常的に可能なことは、都市部の学校はもとより、自然環境に比較的恵まれた農山村であっても、仲間と一緒に大いに共通の体験を愉しみ、生活実感と交流を

深めることになろう。

また、校内施設の地域住民への開放をすすめ、学校の授業に差し支えない限り、常時、立入自由とする。屋外施設のキャンプ場、学校庭園、校舎内に設置する図書館、プール、体育館、小ホール（椅子席）、食堂は、地域との共用施設として、施設設備費を上乗せし、格段に充実したものとするともに、のちの維持管理が円滑に行われるように工夫する。全面改築ではなく、校舎棟の一部を取り壊し改築する計画の場合には、この共用部分を別棟としてもよいであろう。

なお、この計画の実施の際、最大の隘路となるのは運動場の取り扱いであろう。従前通りの形態で運動会を開催するとすれば、依然として年１、２度にすぎない使用に備えて整地した地面を用意しておかなければならないからである。しかし、少人数で、運動を通じて交歓する機会とし、競技会形式のものは別途数校が共同で公営運動場で実施することとすれば、運動場の大幅な縮小と、上記計画の円滑な実施が可能となる。遊び場が少なくなり、放課後、仲間が集まって遊ぶ習慣を失った現代において、学校の休み時間の校庭は、大人の干渉が比較的少なく、しかも異年齢集団が集まって気ままな遊びが展開できる数少ない場といってよく、きわめて重要な意味をもつ。

図２－２の普通教室の改装計画は、現行校舎配置の一部手直しにより、児童生徒数の減少に併せて、順次、早急に実現に移されるべきものとして想定している。もとより、現行教室の面積は、一斉教授を前提とし、切迫した財政事情下で校舎の新増築を続けなければならなかった事情から、一人あたりのスペースを長年にわたって最小限に抑えてきている（４間×５間<7.2m ×９m> ないし６×10mの長方形が定形であった)。「ゆとり」や個性、創造性の涵養が標榜されるなかで、ようやく、児童生徒数が減少に転じた今こそ、教室改革に着手される好機である。「余裕・余剰教室」などでは決してなく、しかるべき時期に教室充実に当てるべく、地域住民や行政担当者が地道に取り組んできた願いと努力の結晶である。

新しい教室は、学習スペースとくつろぎスペースに大別され、学校生活で、従来は、とかく付随的なものとしてしか見られなかった相互交流や自主活動などが充実して行えるように周到な配慮が加えられている。また、教室内での活動がゆったりした空間で行えるように、教室面積が倍増したにもかかわらず児童生徒の収容定員を20人程度に抑えている。

くつろぎスペースには、談話室・軽食室があり、ソファーに座って団欒ができる。ティー・タイムには、別室のキッチン・スペース（冷蔵庫、レンジ、食器棚付）で調製した簡単な食事が用意できる。畳敷の休憩室や板の間のテラスルームで、図書コーナーの本を読んだり、ベランダにある学級栽培園や飼育小屋で動植物の世話をすることもできるようになっている。

このような、新しい教室構造の特色を十分に発揮させて、個性や創造性を育むために運営上、数々の配慮がなされている。

たとえば、授業形式はフレキシブル制で、一斉授業は２－４時間のみ、１時間目および午後は個別指導ないし課題学習とする。休憩時間、昼休み、お茶の時間を交流タイム、自主タイムとして重視し、時間を十分に確保する。非常時以外には全校一斉のチャイムは鳴らさず、各教

室のペースで授業が行えるようにする。

スタッフは1学級当たり3人のチーム編成とし、うち、ひとり（非常勤：短期）は高等学校ないし大学から派遣された奉仕・体験活動志望生徒学生で充てる。教室内にスタッフの部屋を設け、常駐する。

保護者、地域住民、ボランティアなどによる授業見学、参加を歓迎し、その体験・経験を語ってもらう時間として機会として活用する。お茶の時間だけの飛び入り参加も歓迎。

このようなプランを現実に実施に移すには、学校建築、カリキュラム編成、教員配置などの統一的基準とのかかわり、行政的・財施的な支援体勢の整備、共用施設建設に伴う地域との調整など、数々の問題に直面する。児童生徒がその個性と創造性を存分に伸ばせる学習環境の整備が未来社会を規定する視点から、公共事業として関係経費を優先し得るような発想の転換が必要である

この学習環境（校地・教室スペース）改善構想のねらいは、その果たす役割上の「バランス回復」にあり、結果的に、学校が各世代を通じて生きがい支え、地域に根ざした存在として確固たる地歩を確立することを期している。すなわち、この構想に則して、学校の周辺、教室の構造を、自然や人との日常的、濃厚で実感を伴う接触や交流を促進する方向で整備することにより児童生徒の内発性、創造性が発揮され、学びが単に机上での一方型に止まることなく、全生活を通じての全方向型へと転換せしめ、かつ、図書館、体育館、プール、小ホール、食堂、校内庭園、野外炊飯施設など、校内主要施設の地域との共用化によって、学校と地域住民との継続性にあふれた連帯と相互協力が実現されることになる。

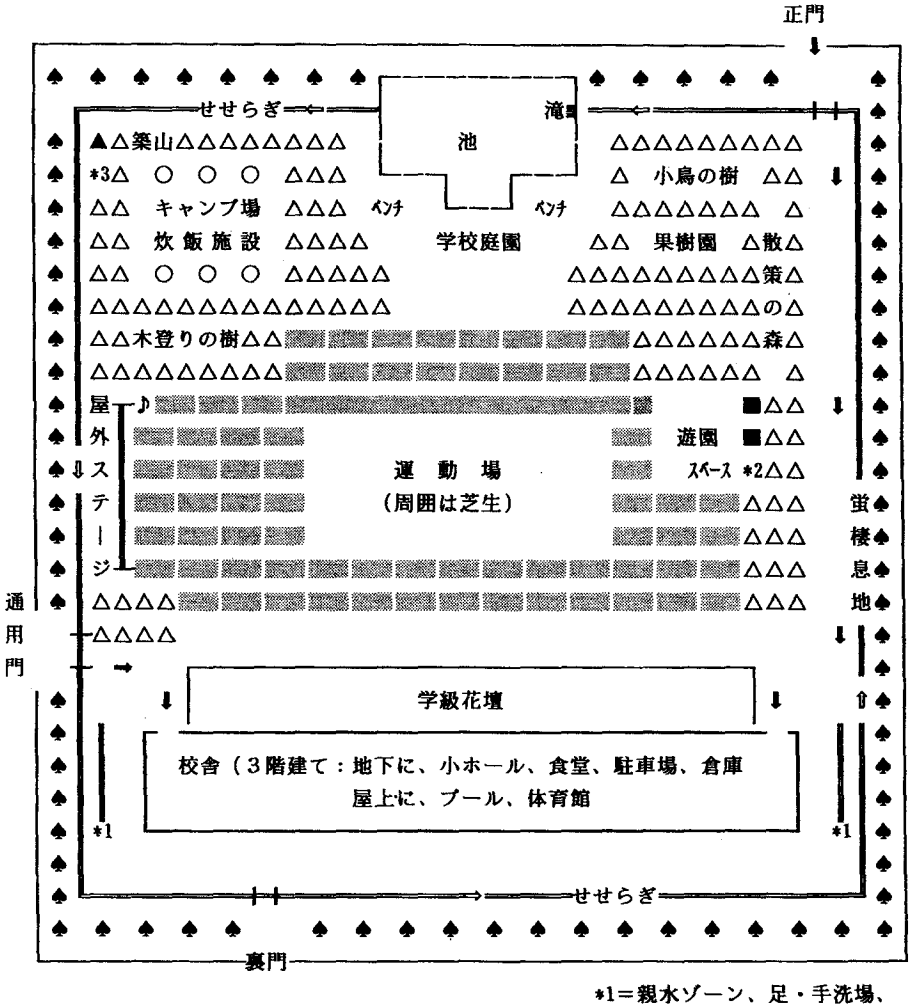
むすび　――「いのち」（個性、創意性、内発性に根ざすその人らしさ）への気づきと発露を支援する学習環境づくり

学習環境学は、究極的に（人間の精神の）生命を育む「土壌学」である、といえる。

そこでは、生命を育てる基礎的部分を担いながら、その存在はきわめて地味で影が薄く、そこで育つ「主体」のうちに秘められた力による、自主性、内発的な成長にすべての望みを託し、その力強さに畏敬と喜びが見いだされる。しかも、土から生まれ土に依存して生命を全うしていることに気づき、そのようなかけがえのない「いのち」の発現、継承、循環をたんたんと繰り返す「主体」を手助けしているという自負と自信が、何にも代えがたい感動が伴う。

換言すれば、学習環境学は、外的条件のみに原因を求め、対症的にその克服と根こぎによってあらゆる問題を処理しようとする近代科学主義の立場とは一定の距離を置き、「主体」の復元力、抵抗力を高め、生命体がそれを持続、継承、循環させ得るような内的条件を整えることに、その視座と方向性を設定するのである。

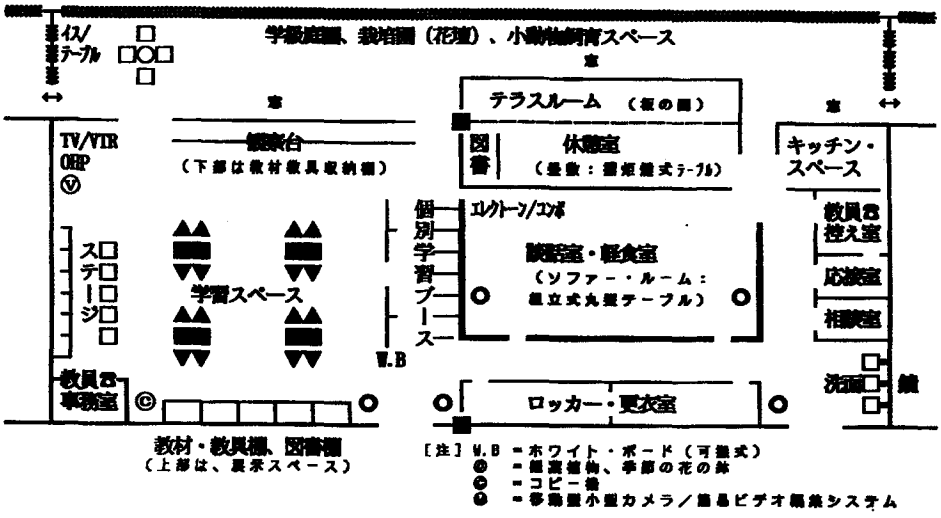
図２－１　校地内施設配置プラン［小学校向］



*1＝親水ゾーン、足・手洗場、
*2＝遊具倉庫
*3＝大樹

・１学校の最大学校規模は、
　　小学校１２学級（一学級児童定員２０人）、児童総数　２４０人
　　中学校１２学級（一学級生徒定員２０人）、生徒総数　２４０人
・特別教室：各教科教室の他に、読書室、談話室、相談室、自習室など
・図書館（１階）、小ホール、食堂（地下）、野外炊飯施設、庭園、運動場
　プール、体育館（階上）は、当該地域と共用

図2－2　教室設計・運用プラン［小学校向］



［教室運用上の関連事項］

- 普通教室：学級定員20人、占有総面積約150㎡。（現行の２教室分）
- 全室、じゅうたん敷き、空調（冷暖房）、完全防音。
- 学習机は正方形と半円形の組み合わせで、授業や作業の形態に合わせて柔軟に配置が可能。
- 机、椅子、仕切り（＝）、ブース、ソファー等、すべてキャスター付で移動できるようにし、常時、模様替えや、学級内の諸発表会、誕生日パーティ、親子共同行事、合併授業等のためのオープン利用が可能。（ただし、キッチンスペース、教員室、畳敷休憩室、ロッカー室等の仕切りは固定）
- キッチンスペースは、給湯のみならず、児童が簡単な調理が安全にできる配慮と設備を有するものとする。人数分のカップ、食器等を入れるための食器棚、軽食保存・加工のための設備（冷蔵庫、電子レンジ等）を完備する。
- 非常時以外、全校一斉のチャイム、校内放送は行わない。各教室の状況に合わせて、独自のペースで平穏に授業が展開できるようにする。校内の連絡は、児童会自主制作の広報ビデオ（週刊）を配布。
- 授業は、フレキシブル制で、一斉授業は２－４校時まで。１校時および午後は、個別指導ないし課題学習とする。成績評価は、教科単位ではなく、具体的な行動を対象とする。
- 授業の間の休憩時間、昼休み、お茶の時間（児童が交代で企画実施）を、交流タイムとして重視し、十分にとる。たとえば、40分授業で休憩20分、昼休み80分、お茶の時間40分など。
- 教員は、１学級３人ずつ配置、うち一人は非常勤で、高等学校、大学から派遣の奉仕・体験活動志望者で当てる。教室内に活動の拠点を置き常駐。（専用電話＜ダイヤルイン＞を設置）全校職員間の連絡は、情報機器（校内電話、ファックス等）により行う。
- 放課後、残留して教室を自由に利用できる。非常勤の教員（ボランティア）が交代で、対応する。ただし、夏は午後７時まで、その他は午後６時まで。
- 保護者、地域住民、学生ボランティア等による授業見学・参加は、常時歓迎。その体験・経験を語ってもらう機会として大いに活用する。お茶の時間だけの飛び入りも大歓迎。
- 教室内にある畳敷休憩室内の図書棚は、児童の自主管理とし、自分のお気に入りの本を数冊ずつ持ち寄り自由閲覧とし、相互理解と話題提供に資する。
- 全校の共通施設として、食堂（アラカルト・メニュー）*、交流スペース、小ホール*、体育館*、プール*、図書館*、読書室、特別教室（実験室、視聴覚室、音楽室、家庭科室、図工室等）を別途用意する（＊は、地域との共用施設とし、格段に充実させる。授業中は、学校優先使用）。トイレを含め、諸施設を居住性を高める観点から再点検し、整備する。
- 教室内の清掃は、ふだんは、児童が当番制で実施する。ただし、週２回（休日）は、専門業者に委託して総点検、汚れ落としを念入りに行う。
- 学校週休は、水曜日と日曜日とする。土曜日は通常授業とし、保護者が気軽に参加できる行事や授業プログラムを組む。

[注]

本稿は、下記に掲げる既発表の拙著論文の底流にある視点、課題、方法等を集約したものである。

なお、図表は、本稿のために新たに作成した。

1)「イメージ分析の手法による学習環境論序説」
(放送教育開発センター『研究紀要』第7号、1992年　所収)

2)「学習環境論序説――映画史料のイメージ分析によるアプローチ」
(『人間形成と学習環境に関する映画史料情報集成』風間書房、1993年　所収)

3)「校歌論――豊中市立学校の学習環境イメージ」
(豊中市史編纂委員会『市史研究紀要』第2号、1993年　所収)

4)「下村兼史論――内に情熱を秘めた<案山子>」
(『大阪大学人間科学部紀要』第20巻、1994年　所収)

5)「史料としての映画研究序説――教育関係映画を中心として」
(『大阪大学人間科学部紀要』第14巻、1988年　所収)

6)「ドキュメンタリー映画論」(『大阪大学人間科学部紀要』第16巻、 1990年　所収)

7)「ドキュメンタリー映画の製作」(『大阪大学人間科学部紀要』第19巻、1993年　所収)

8)「対日占領における民間情報政策――ナトコによる啓蒙活動の実態と背景」
(『大阪大学人間科学部紀要』第 9巻、1983年　所収)

[参考文献]

1) 市川定夫『環境学』(藤原書店、1993年)
2) 細谷俊夫『教育環境学』(目黒書店、1951年)
3) 山下俊郎『教育的環境学』(岩波書店、1928年)
4) 飯島衛『多様性と個性――生物学基礎論への試み』(みすず書房、1978年)
5) 中村勝己『経済的合理性を超えて』(みすず書房、1988年)
6) L. マンフォード、久野収訳『人間――過去・現在・未来』下 (岩波書店、1984年)
7) 久保田競『脳の発達と子どものからだ』(築地書館、1981年)
8) 和田重正『教育は生活から――成長の下地を養うために』(地湧社、1983年)
9) 近藤章久『感じる力を育てる』(柏樹社、1982年)
10) ルドルフ・アイエンハイム、関計夫訳『芸術心理学』(地湧社、1987年)
11) ジェームス・マーセル、美田節子訳『音楽教育と人間形成』(音楽の友社、1984年)
12) 正岡子規「墨汁一滴」(『子規全集』第11巻　講談社、1975年　所収)
13) 長谷川伸「ある市井の徒」(『長谷川伸全集』第10巻　朝日新聞社、1971年　所収)
14) 杉原せつ『毎日が縁日のようだった――なつの下町日記』(日本エディタースクール出版部、1991年)

15) 矢口高雄『ボクの学校は山と川』(講談社、1993年)
16) 坂田明『瀬戸内の困ったガキ』(晶文社、1994年)
17) 笹山久三『幼年期　かがやく大気のなかで』(農文協、1992年)
18) 菅野誠、佐藤譲『日本の学校建築』<本編、資料編>(文教ニュース社、1983年)
19) INAX『学校建築の冒険』(株式会社INAX、1988年)
20) 手塚郁恵『森と牧場のある学校』(春秋社、1991年)
21) A. D. Pellegrini "School Recess and Playground Behavior --Educational and Developmental Roles" (State Univ. press of New York、 1995年)
22) S. Maclure "Educational Development and School Building -- Aspect of Public Policy" (Longmann Group Limited, 1984年)

[参考映像]　*は、16粍映画フィルム
いずれも大阪大学人間科学部教育制度学研究室所蔵

1)『こども議会』(東宝教育映画、1947年、19分) *
2)『町も学校』[原題名は" NEAR HOME"](イギリスベーシックフィルム<イギリス>、1948年、23分) *
3)『夜間中学』(日本大学芸術学部、1956年、42分) *
4)『九十九里浜の子供たち』(東映教育映画部、1956年、31分) *
5)『アリサーーヒトから人間への記録』(青銅プロダクション、1986年、78分) *
6)『やかまし村の子どもたち』(Svensk Filmindustri<スウェーデン>、1986年、90分)
7)『自然は先生ーー森の中の泥んこ保育園』(東京テレビジョン、1993年、45分)
8)『大草原の少女　みゆきちゃん』(北海道放送、1991年、69分)
9)『北上川とカッパたち』(岩手放送、1991年、45分)
10)『放課後の子どもたち』(民間放送教育協議会、1989年、45分)
11)『水上隣保館の子供たち』(毎日放送、1995年, 58分)

How can we make better conditions for cultivating our personality, creativity and spontaneity by the contact with environmental factors ?

Akira ABE

This essay is the essence of my several papers or literary works on above theme, published in recent years.

Approaching this theme, I have been laying stress on the following points.

The 1st point is to research on the places where we cultivate our personality, creativity and spontaneity, the generations when we do so, and the influences that one generation produces upon another. For example, in our childhood, it's very important and happy to have full time of playing fully with many other friends in the fields, forests or riversides. Therefore the experiments of those days exercise various influences upon one's thought, feeling and behabior through life. Violences in the school or home, sexless-couples or sexual aboidance of elite youth, unadaptability to the company, the school or other organization and so on, the most of these troubles may be concerned contactly with childhood behavior.

The 2nd point is to analize what is the essencial and usuful factors on cultivating our personality, creativity and spontaneity. For example, in studies on the impact of the surrounding in childhood, we have given just little attention to the roles of the un-measurable factors such as atomosphere, signs, tendency, feelings, intuition and so on, that may have a potent influence upon children than the measurable. We must take action for keeping balance between the un-measurable and the measurable, under the bias of laying weight upom the un-measurable factors.

The 3rd point is to suggest how we can arrange suitable places and chances for cultivating our personality, creativity and spontaneity. For example, at minimum cost and money we can get more better schools for associating each other and contacting with natural objects, by enlarging classrooms twice size and refreshing school-grounds. In the classroom, the spaces for children's commucation and relaxation is essential to above-mentioned cultivation. As We have been regard the classroom as the space for only making lecture by one way from teacher to children, we have been provided only just narrow classroom-space for long time. The playground also have been lacking in taste, such as wide track-field, that is used only one or twice in a year, places in the center, and shool garden, trees for watching birds, flowers or fruits and spaces for familiar talk are sent away to the corner of school-ground.

As the method suitable for researching this thema, I have used the following in my recent

works.

The 1st is the practical use of one's life story or memoirs, in order to research longitudinal relations between one and environmental affairs, especially concerning persons who spent their life of full personality, creativity and spontaneity. Through the "conversation" with them, we can catch the influences of surrounding factors on building up one's character.

The 2nd is the practical use of cine-films picturing children's life in those days and video recording it in these days. They are very usuful in order to know especially signs, tendency, feelings, intuition and so on, that we never clearly find out in the papers. For preparing, more better conditions for the same research, we must but also try to produce many kinds of video-documents as our research materials for getting more accurater data by observing vivacious behabiors, not only to use cine-films or video produced by motion-picture- company or TV broadcasting-station.